

人外魔境

遊魂境

小栗虫太郎

青空文庫

死体、櫓を駆る

いよいよ本篇から、魔境記も大ものばかりになってくる。まず、その手初めが『Ser-mi-k-suah』《セル・ミック・シユア》“グリーンランド中部高原の北緯七十五度あたり、氷河と峻険と猛風雪と酷寒、広茫こうぼう数百の氷河を擁する未踏地中のそのまた奥。そこに、字義どおりの冥路よみじの国ありとこう、『Ser-mik-suah』《セル・ミック・シユア》は極光下の神秘だ。では一体、その「冥路セル・ミック・シユアの国」とはどういうところか。

まず、誰しも思うのは伝説の地だということ。グリーンランドの内部は、八千フィートないし一万フィートの高さのわたり、大高原をなしている。そして、それを覆う千古の氷雪と、大氷河の囲繞いによう。とうてい五百マイルの旅をして核心を衝くなどということは、生な身の人間まみのやれることではない。だから、そこに冥路の国がある、死んだ魂があつまる死霊の国がある——とエスキモー土人が盲信いまだを抱くようになる。

と、これがマアいちばん妥当なところで……たぶん皆さんもそうお考えであろうと思われる。また、「冥路セル・ミック・シユアの国」について多少の知識のある方は、一歩進んだものとして次

のようなくとも言うだろう。

馬來マライの狂狼症アモックをジャングルの妖とすれば、「冥路セル・ミク・シユアの国」の招きは氷の神秘であろう。それに打たれた土人は狂気のようになり、家族をわすれおのが生命をも顧みかえりず、日ごろ怖れている氷嶺の奥ふかくへと、櫛そりをまつしぐらに走らせてゆく。まばゆい、曼珠沙華まんじゆしゃげのような極光オーロラの倒影。吹雪、青の光をふきだす千仞せんじんの氷罅クレヴァス。——いたるところに口を開く氷の墓の遙かへと、そのエスキモーは生きながら吞のまれてゆく。

と、いうように氷の神秘と解釈する。それだけでも、「冥路セル・ミク・シユアの国」は興味津津しんしんたるものなのに、一度折竹の口開かんか、そういう驚異さえも吹けば飛ぶ塵のように感じられる。それほど……とは何であろう。曰く、想像もおよばず筆舌に尽せず……ここが真の魔境中の魔境たる所以ゆえんを、これからお馴染なじみふかい折竹の声で喋しゃべらせよう。

「なるほど、君も『冥路セル・ミク・シユアの国』について、ちつとは知っているね。だが一つだけ、君がいま言ったなかに間違いがあるよ。というのは、『冥路セル・ミク・シユアの国』の招きでエスキモーが櫛そりを走らせる。まるで、とつ憑つかれたようになって、夢中でゆく。というなかに、一つだけある」

「へええ、という何だね」

「つまり、生きた人間ではないからだ。その、櫛をはしらせるエスキモーは、死んだやつなんだ」

「そうだろうよ」と、私はひとり合点をして、頷いた。ついに、折竹も語るに落ちたか、魔境中の魔境などと偉そうなことをいうが、やはり結句は、死霊あつまるというエスキモーの迷信譚。よしよし日ごろやつつけられる腹癒せに今日こそ虐めてやれと、私は意地のわるい考えをした。

「なるほど、死んだ人間が櫛をはしらせる。じゃそれは、魂なんてものじゃない、本物の死体なんだね」

と参ったかとはかりに言うのと、意外なことに、

「そうだ」と折竹が平然というのである。

「死体が櫛を駆る。ふわふわと魂がはしらせる幻の櫛なんて、そりや君みたいな馬鹿文士の書くことだ。あくまで、冷たくなつたエスキモー人の死体。どうだ」

私は、しばしは唾然たる思い。すると、折竹がくすくすツツと笑いながら、懐から洋書のようなものを取り出した。みると「グリーンランドの氷河界」という標題。一八七〇年にグリーンランドの東北岸、マリー・ファルデマー岬に上陸したドイツ隊の記録だ。

それを、折竹がパラパラつとめくり、太い腕とともにぐいと突きだしたページには、

翌五月十六日、依然天候は険悪、吹雪はますます激しい。天幕内の温度零下五十二度。^{テント} 囊内からはく呼吸^{いき}は毛皮に凍結し、天幕のなかは一尺ばかりの雪山だ。^{テント} すると突然、エスキモーの『E-Tooka-Shoo』《エ・ツーカー・シユー》が死んだような状態になった。脈は細く、ほとんど聴きとれない。体温は三十二度。まさに死温。

地図Ⅱグリーンランドとセル・ミク・シユア

「死んだよ」と、私がもう一人のエスキモーの『AL-Ning-Wa』《アル・ニン・ワ》にふり向いて、

「だが、どうして急にこんな状態になったか、わからん。さっきまで、ピンシャンしてた奴が、急にこうなっちゃった」

と、その時だ。いきなり、死んだはずのエ・ツーカー・シユーが、むつくと起きあがった。蘇えたか、と、支えようとする私をアル・ニン・ワは押しとどめ、

「死んでいるだよ。動いているだが、エ・ツーカー・シユーは死んでいるだ」という。私が、

★北極

ランド

ミアアカデキ
氷河

探検家エリ
クセン死去地

セル・ニク・シナ

?

一九三一年

フォン・グロナウ飛行通路

折竹の攻撃通路

「ディヴル
ス・サム
悪魔の
拵指」

ホル・ランド

ワシントン
ランド

フムホルト
氷河

ケ入江

エター部落

スミス瀬戸

ハフナー山

メルウイ
湾

バツフィン
湾

ランド

グリーン
ランド

エレスメア
ランド

なにを言うかと屹ぎツとみる目差まなざしを、その老エスキモーは受けつけぬように静かに、
「論より証拠というだて、ちよつと手を握つてみなせえ、脈はあるだかね。おいら、生き
てる人間みてえに、暖かになつたかね」

なるほど先刻さつきと、彼のいうとおり少しも変つていない。死体がうごく——と、呆気あつけにと
られた私にアル・ニン・ワは言い続ける。

「そつとして……。旦那は、何もしねえほうが、いいだよ。エ・ツーカー・シユーは、これ
から『冥路セル・ミク・シユアの国』へ召されるところだから。死骸になつてから行かされるなんて、お
いらの種族はなんて手間が掛るだべえ」

とみる間に、エ・ツーカー・シユーがのつしのつしと歩きはじめた。まるで、ゼンマイ人
形のような機械的な足取り。やがて天幕テントをまくったとき吹きこむ粉雪のために、彼の姿は
瞬間にみえなくなった。それなりだ。橇犬の声はやがて外でした。岩がちぎってくるよう
な吹雪の合間合間に、しだいに遠ざかつてゆく鈴の音、犬の声。

行つてしまった。極北の神秘「冥路セル・ミク・シユアの国」は実在せり！エ・ツーカー・シユーは死
体のまま橇を駆り、晦冥かいめいの吹雪をつき氷の涯はてへと吞まれたのだ。

なんたる怪か——と、あきれる私の耳元へ折竹の声。それが、また意味はちがうが打ぶ殴なぐるような驚きを……。

「どうだい、僕が魔境中の魔境といったのも、ハツタリじやあるまい。それに、この探検にはひじような意義がある。じつは、国際法の先せん占せん問題にも触れている」

と、私に固唾かたずをのましたその「先占」とは。例をわが国にとれば、南極問題あり。かの大和雪原領有を主張する、白瀬中尉の熱血。また近くは、フランスと争った新南群島の先占。いずれも事新しいだけに賢明な皆さんのまえで、この言葉の説明の必要はあるまいと思われる。つまりこれは、無主の地へいちばん先に踏み入ったものが、その本国政府に言つて先占宣言をさせる。今後この地は自国の領土である、異議あるものは申し出い——というのが「先占」。

では今、国際紛争を仄ほのめかすような先占問題がからむという、極北のその地とは一体どこのことだろう。私は、深くも聴かずひとり合点をして、

「なるほど、それが『冥路セル・ミク・シユアの国』探検の副産物というわけだね。じゃ、どこだ？ その、新発見の北極の島つてえやつは」と言うと、折竹はいけぞんざいに手をふつて、違ちがう、と嘲けるように言う。

「島じゃない。その無主の地というのは、グリーンランドの内部だ」

驚いた。現実を無視するにもこれほど痛快なものに、私はまだ出会ったことがない。

全島、ヨーク岬をのぞくほかデンマーク領のグリーンランド——。よしんば内部が、

「冥路セル・ミック・シユアの国」をふくむ広茫こうぼうの未踏地とはいえ、沿岸を占めれば自然奥地も領地とな

る——国際法には奥地主義の法則がある。それでは、先占うんぬん云々の余地は完全にはないではないか。無主の地はたとえ一坪たりと、いま北極圏の大島グリーンランドにはないのだ。

それにもかかわらず……。

と、いうところが「死体駆る櫓そり」とともに、「冥路セル・ミック・シユアの国」探検の大眼目になつてい

る。しかしこれは、暫く興味上保留することにして、では、そこを先占しようとしたのは、いずれの国であろう。訊くと、折竹は紅潮さえもうかべ、

「どこって　それが他の国ならいふ必要のないことだ。日本政府が、もしも僕の仕事を追認してくれてだね、『冥路セル・ミック・シユアの国』の先占宣言をしてくれたら……」

ここで、もはや言うべき言葉もなくなつた。ドイツ人が夢想する新極北島アイランド・アルクチスを徒手空拳しゅくくうけんで実現しようとした折竹の快拳談。氷冥郷ひょうめいきょうをあばく大探検にともなう、国

際陰謀と美しい情火のもつれを……。さて、彼に代つてながながと記すことにしよう。

フアティマ
大力女おのぶサン

全米に、かなり名の聴えたウインジャマー曲馬団サーカスが、いまニューヨーク郊外のベルローズで興行している。サーカスの朝はただ料理天幕クッキング・テントが騒がしいだけ……。芸人も起きてこず野獣の声もない、ひっそり閑とした朝まだきの一刻がある。そのころ、水槽すいそうをそなえた海獣カラルの檻のまえで、なにやら馴育師トレイナーから説明を聴いているのが……。というよりも甚はなだしい海獣の臭気に、鼻を覆うていたのが折竹孫七。

「これが、今度入りました新荷あざらしでがして」と、海豹あざらし使いのヒューリングがしきりと喋っている。なかには、海豹あしか、海驢あしか、緑海豹グリーン・シールなど十匹ほどのものが、鰭ひれで打ちあいウオーと咆ほえながら、狭いなかを捏こねかえすような壮観だ。

「じつは、なんです。これは、さるところから纏まとめて手に入れまして……。さて、訓練にかかったところ、大変なやつが一匹いる。どうも見りや海豹あざらしではない。といって、膾おつと炙せでもない、海驢あしかでもない。海馬ウオーラスでもなし、海象ウオーラスでもない。さだめしこれは、新種奇獣せいしゆだろうってえんで、いちばん折竹の旦那にご鑑定をねがったら、きつとあの不思議な

野郎の正体が分るだろう……」

というところへ「これはご苦労さんで」と、親方のウィンジャマーが入ってきた。ウィンジャマーは、きょう折竹の連れである自然科学博物館の、ケプナラ君とは熟知の仲である。ペコペコ頭をさげて折竹に礼をいつてから、おいキャプテンと、ヒューリングに言った。

「こりやね、一つお前さんに仕方^{ばなし}をして貰おうよ。海獣^{けもの}の訓練の順序をお目にかけてからでない、どんなにあの野郎が手端に負えねえやつかということが、旦那がたに呑み込めねえかも知れねえから……」

と、ヒューリングがまず西洋鎧^{よろい}のような、鉄葉ズボン^{ティン・パンツ}という足部保護具^{そくぶ}をつける。これを着けないと、いつ未訓練のやつに、がりがりつとやられるかも知れない。檻^{おり}の戸をあけてそつと内部^{なか}にはいると、見かけは鈍重そうな氷原の豹どもも、たちまち牙を露^むきだし、野獣の本性をあらわしてくる。ヒューリングは、鉄葉ズボン^{ティン・パンツ}のうえをガリガリやられながら、鉄棒につかまって外側へ声をなげる。

「最初は、生魚食いのこいつらに、死魚を食わせる。ぴんぴん糸で引っぱって躍らせていると、うっかり生きてると間違えて、ガブリとやる。そうして、餌^{えき}についたら、もう占め

たもんで……。まもなく、飾^{パステール}り台のうえに、ちよこなんと乗る。撞^{キユ}球棒のうえへ玉をのせたのを、鼻であしらいあしらい梯子^{はしこ}をのぼってゆく。それから、梯子の頂上でサツと撞球棒を投げ、見事落ちてくる玉を鼻^{はなづら}面で受けとめる。

——というようになれば、いっぱしの太夫。手前も、給金があがるという嬉しい勘定になる。ところがです、あの『Gori-Nep』の野郎ときたら手端にも負えねえ」

「『Gori-Nep』《ゴリ・ネプ》“つて?”と折竹がちよつと口を挟^{はさ}んだ。

「つまり、野郎は演^ネ芸用海豹^{ツブ}仲間のゴリラですからね。マア、この鉄葉ズボン^{ティン・パンツ}の穴をみてくださいよ。たいていの海獣^{けもの}なら二、三度で噛^かみ止みますが、あいつの執念ときたらそりや恐ろしいもんで……。ええ、その大将はすぐ参ります。じつは、野郎だけが独房生活で」

その、通称『Gori-Nep』《ゴリ・ネプ》“という得体のしれぬ海獣を、まもなく折竹はしげしげとながめはじめた。身長は、やや海豹^{あぎらし}くらいだが体毛が少なく、まず目につくのがおそろしく大きな牙。おまけに、人を見る目も絶対なじまぬ野性。ついに折竹にも見当つかずと見えたところへ「あれかな」と、連れのケプナラを莞爾^{かんじ}となつて、ふり向いた。

「ケプナラ君、君はエスキモー土人がいう、『A-Pellah』《アー・ペラー》“を知っているかね」

「アー・ペラー　いつこうに知らんが、なんだね」

「海豹あざらしと海象ウオーラスの混血児だ。学名を『Orca Lupinum』《オルカ・ルピヌム》“と違って、じつに稀まれに出る。その狂暴さ加減は学名の訳語のとおり、まさに『鯨狼』という名がぴたりと来るようなやつ。孤独で、南下すれば臘肭獸群おつとせいをあらず。滅多にでないから、標本もない。マア、僕らは、きよう千載に一遇の機会で、お目にかかれたというわけだ」

「ううむ、そんな珍物かね」と、温厚学究君子のケプナラ君は感じ入るばかり。果して、この奇獸は唯ただもの者ではなかった。やがて、折竹を導いて「冥路セル・ミク・シユアの国」へと引きよせてゆく、運命の無言の使者だったのだ。咆ほえもせず、じつと瞳を据すえて人間を見わたしている、狡智こうち、残忍ぞというか慄ぞつとなるような光。これぞ、極洋の狼、孤独の海狼と——なんだか睨にらみかえしたくなる厭いやな感じが、ふとこの数日来折竹に絡まわりついている、ある一つの異様な出来事を思いださせたのである。それは、両三度を通じておなじような意味の、次のような手紙が舞いこんできたのだ。

敢あえて小生は、世界的探検家なる折竹氏に言う。この地上にもし、まだ誰も知らず一人も踏まぬ国ありとすれば、その所在を、ご貴殿にはお買い取りになりたき意志なきや。小

生は、それほどのものを売らねばならぬほど、目下困窮を極めおり候。

明日、午後三時より三時半までのあいだ、東二十四番街のリクリエーション埠頭の出
オールド・クロウ際、「老鴉」なる酒場にてお待ち申しおり候、目印しは、ジルベールのジンと書いてある貼紙の下。

K・M生

未知の国売物——じつに空前絶後ともいう奇怪なことである。まして、国というからには単純な未踏地ではあるまいが、まさか、そんなものがこの地上にあらうとは思われな
 い。折竹はなんだか揶揄からかられるような気がして、ついに、二度三度と手紙がきても行かずにいた。

と、つぎに昨日のことだった。ふいに、男女二人の訪客があつて、その名刺をみたとき
 オヤツと思つたほど、じつにそれが意想外の人物だったのだ。

無疵ラッキのルチアノ——いまタマニーに風を切るニューヨークの大親分。牝ニツキ鶏キフロア、
 彼の情婦で魔窟組の女王、千人の妓と二百の家でもって、年額千二百
 万ドルをあげるといふ、大変な女だ。そういう、暗黒街に鳴る鏘そう々たる連中が、いかな

る用件があつてか丁重きわまる物腰で、折竹の七十五番街の宿へやってきた。

世界的探検家対ギャングスター・ナンバーワン。まずこれは、一風雲必ずやなくてはなるまい。

「ご免なすつて」と人相は悪いがりゆつとした服装の伊太公、フローは、まだ若くガルボ的な顔だち。しかし、駆懲剤の浸染はかくし了せぬ素姓をいう……、いまこの暗黒街を統べる大顔役二人が、折竹になに事を切りだすのだろう。

「じつは、高名な先生にお願いの筋がござんして。と、申しますのは余の儀でもござんせん。ここで、分りのいい先生にぐいと呑みこんで頂いて……」

「なにをだ」

「すべて、どこへ行くとか何をするとか——その辺のところは一切お訊きにならず、ただ手前の指図どおり親船に乗った気で、ちかく『Salem』《サレム》」をでる『フラム号』という船にのつて頂く」

「おいおい、俺をどこかの殴りこみに連れてゆくのか」

「マア、お聴きなすつて」と、ルチアノはかるく抑え、

「で、その船は北へ北へとゆく。すると、そのどこかの氷のなかにだね。ぜひ先生のお力

を拝借せにやらねえものが、おいでを、じつと待つてるんですよ」

「では、そこは何処なんだね。また、僕の力を借りるとは、何をするこなんんだ？」

「どうか、それだけはお訊きにならねえで。ただ、申しあげておくのは、けっして邪やましいことじゃない。法律に触れるようなことでは絶対にならないという……その点だけのご安心願いたいもんで」

折竹は、ただただ呆れたように瞬しばたくだけ。ギャングども、大変なことを言ってきたが、俺の力を、借りたいというからには探検であろうが、いま、年収八千万ドルといわれるルチアノの仕事なら、あるいはそれが途方もないものかも知れぬ。どこだろう、北へ北へといつて氷のなかに出る。はてなど、思いめぐらすが、見当もつかない。ただ、匂ってくるのは黒暗々たる秘密のにおい。

「ねえ、先生、ご承知くださいませね」

と、フロアが間に耐たまえられないように、

「私たちだつて、偶たまにや真面目な稼たぎの一つくらいはしますからね。先生にだつて一生樂たのみに暮せるくらいのお礼は差しあげるつもりなんですよ。ねえ、先生ったら、うんと言つて……」と、それでも黙っている折竹に焦じれたのか、それともフロアの本性か、じりじり

つと癩癩筋。
かんしゃく

「じゃ、私たちの仕事なんて、お気に召さないんだね」

「マア、言やね」と折竹はハッキリ言った。すると、扉のそとでコトリコトリと足音がする。いるな、ルチアノの護衛、トリッガー・マンのジップか　と思つたが顔色も変えない、

折竹にはルチアノも弱つたらしい。

「ご免なすつて。牝の蹴合鷄みたいな阿魔あまなんで、とんだことを言いやして。とにかく、この問題はお考え願つときましよう。いずれは、うんと言つて頂かなきやルチアノの顔が立たねえが、そんな強こわもて面は百万だら並べたところで、先生にや効目ききめもありませうまい。なあ、俺らが来てもビクともなさらねえなんて……、フロア、お立派な方だなア」

折竹は、その間ものんびりと紫煙にまかれている。トリッガー・マンの銃口を扉のそとに控えていても、アンダーワールドの闇黒街えんまの閻魔夫婦を目のまえに見ていても、不義不正や圧迫には一分の揺ぎもしない彼には、骨というものがある。静かだ、ウエスト・エンドアヴェニューの雑踏が蜂のうなりのように聴えてくる都心紐育下町マンハッタンのなかにも、こうした閑寂地がある。がいよいよルチアノも手がつけられなくなつて、

「マア、これをご縁にちよいちよい何ううちにな、先生だつて情にからむだろう。なにも、

殴り込みばかりが能じやねえ。誠心誠意という、こんな手もありませア」

「おいおい、ギャングの情にからまれるのか」

「そう仰言られちや、身も蓋もねえが」

とルチアノは苦笑しながら立ちあがる。が、なんと思ったか、ちよつと目を据えて、

「時に、あつしらしくもねえ妙なことを伺いやすが……最近、先生ところへ匿名の手紙が来やしませんか」

「来たよ。しかし、地獄耳というか、よく知ってるね」

「ご注意しますが、絶対あんなものには係わらねえほうが、いい。ずいぶんコマゴマしたことで、無駄な殺生をしたり、ケチな強請をするために大変な筋書を書く——というような奴が、ゴロゴロしていますから。そこへゆくと、あつしらは実業で……」

と、これがルチアノの帰りしなの台辞だった。

二人が帰ると、ギャングという初対面の怪物よりも、なにを彼らが企てつつあるのか、陰の陰の秘密のほうに心が惹かれてゆく。

極洋——そこにルチアノ一味がなにを目指している。いわば変態ではあるが一財閥ともいえる、ルチアノ一派の実力で何をしようとするか。またそれがあの手紙の主とどん

な関係にあるのだろう　　と思うと、イースト・サイドの貧乏窟でせつかくの秘密をいだきながら、ギャングの圧迫のためうち顛ふるえている、一人の可憐な乙女が想像されてくる。未知の国売物——それと、ルチアノ一味のギャングとのあいだには、見えない糸があるのではないか。

行ってみよう、彼はやつとその気になった。が「オールド・クロウ老　鴉」というその酒場へいっ

てみると、すでに日も過ぎたが、それらしい人影もない。見えない秘密、いや、逸してしまつた秘密……とやきもきとした一夜が過ぎると、翌朝はケプナラとともにウインジャマサーカス一曲馬団。いま、彼はあれこれと思いながら、奇獣「アー・ペラー鯨　狼」のまえに立っているのだ。すると、ケプナラがウインジャマ親方に、

「だが、よくこのアー・ペラー鯨　狼は餌にきましたね」

「そこです。最初は、誰がやつても見向きもせんでした。ところが、あいえんきえん相縁奇縁フアティマというかたつた一人だけ、この先生に餌を食わせる女がいる。呼びましょう。オイ、フアティマ牝河馬のマダムに、ここへ来るようにつて」

と、やがて現われたのが意外や日本人。『Onbu-san 《オノブ・サン》, the Fatima 《ゼ・フアティマ》』——すなわち大女おのぶサンという、重錘揚げの芸人だ。身長五尺九寸、

体重三十五貫。大一番の丸鬚まるまげに結つて肉襦袢姿タイツ、それが三百ポンドもある大重錘をさしあげる、大和撫子やまとなでしこならぬ大和鬼蓮おにはすだ。

狂人の無電か

「おやおや、故国くにの人だというから、もうちつと好い男だと思つたら……。えつ、あんたがああ、探検屋折竹」

とこれが、折竹にひき合わされたおのぶサンの第一声。サーカスに在るだけにズケズケと言う。悪口、諧謔かいぎやく、駄洒落だじゃれ連発のおのぶサンは一目でわかる好人物らしい大年増。

十歳で、故郷の広島をでてから三十六まで、足かけ二十六、七年をサーカス暮し。

このウインジャマー曲馬団サーカスの幌馬車時代から、いま、野獸ミナジリー・デン檻マフラット・カだけでも無蓋貨車マに二十台という、大サーカスになるまで、浮沈を共にした、情にもろい気さくな性格は、いまや名実ともにこの一座の大姉御おおあねい。といつて、愛嬌はあるが、寸分も美人ではない。まあ、十人並というよりも、醜女しこめのほうに分があるう。

「ほら、私だといふとこんな具合で、化物海豹あざらしめが温和おとなしくなつちまう」と、餌桶えづくいっ

ぱいの魚をポンポンくれているおのぶサンと、^{アー・ペラー}鯨狼をひき比べてみているうちに、折竹がふうつと失笑をした。それを見て、

「この人、気がついたね」

と、おのぶサンがガラガラツと笑うのだ。

「なんぼ、私とこの大将と恰好が似ているからって、別に、親類のオバサンが来たなんてんで、懐いたんじやないよ。つまり、相縁奇縁つてやつだろうね。私もこいつも、知らぬ他国を流浪るろうの身の上だから、言葉は通じなくても以心伝心てやつ」

「おい姐さん、以心伝心で口説いちゃいけねえよ」

と、白粉つ気はないが、道化らしい顔がのぞく。

馬を洗う音や、曲奏の大喇叭チユバの音。楡エルムの新芽の鮮緑がパツと天幕に照りはえ、四月の春の陽がようやく高く高くなるうとするころ、サーカスのその日の朝が目醒める。しかしまだ、^{アー・ペラー}鯨狼をここへ売ったのが何者かということが、最後の問題として残っているのだ。それに、親方が次のように答える。

「なんでもね、二つちも三つちもいかなくなつた捕鯨船の後始末とかで、こいつを売つたやつの名は、クルト・ミュンツア、です。住所はイースト十四番街の高架線の下で」

この、鯨狼の出所については折竹よりも、むしろ、このほうの専門家のケプナラ君に興味多いことだ。ところが、どうしたことかそれを聴くと、ちよつと、折竹が放心の態になった。ただ、〃クルト・ミュンツァ [Kurt Munzer]〃と呟いている訳は、あの、未知国の所在を売るといふ匿名の手紙の主の、K・Mというのがクルト・ミュンツァの頭文字。

事によつたら、これが導きとなつてあの手紙のわけも、また、それに関連しているらしいルチアノ一派の策動の意味も——すべてが明白になるのではないか。してみると、この奇獣アー・ペラー鯨狼も全然無関係ではない。いや、無関係どころか極地に春がきて、ながい闇が破れるようにすべてを分らせる——と、折竹はそんなように考えてきた。

金鉱、ダイヤモンド鉱それとも石油か、いま、ルチアノ一味が全能力をあげて、それに打衝ぶつかろうという意気が仄ほみえるだけに、……秘密の、深い深い底をのぞき知ろうとする、彼はいま完全に好奇心の俘虜。

「折竹さん、海獣けものとばかり交際つきあつてて、あたしを忘れちゃ駄目だよ。一度、ぜひ伺わせて貰うからね」

「来給えな」と言つたのも、上の空。おのぶの言葉も瞬後に忘れてしまったほど、心は、クルト・ミュンツァが住む高架線エル・トラツクの下へ。

その後、彼とケプナラがイースト・サイドへ出掛けていった。

そこは、二十七か国語が話されるという、人種の坩堝るつぼ。極貧、小犯罪、失業者の巢。いかに、救世軍声を囁からせどイースト・リヴァの澄まぬかぎり、このどん詰デッド・エンドりは救われそうもないのだ。

「ここが、二〇九番地だから、この奥だろう」

と、皮屋と剃かみそり刀屋のあいだの階段をのぼり、突き当りのボロ蜂窩アパートへはいってゆく。

廊下は、壁に漆喰しっくいが落ちて割板だけの隙から、糸のような灯が廊下にこぼれている。

年中、高架線の轟音と栄養不足で痛められている、裸足はだしの子供たちがガヤつく左右の室々。やつと、さぐり当てたクルト・ミュンツアの部屋を、折竹がかるく叩ノックきをした。

「入れ。誰だ、マツデンかい」

あけると、意外な男二人にオヤツと目をみはる。どこか悪いらしく寝台にねているミュンツアは、三十恰かつこう好こうの上品な面立ちの男だ。折竹が、来意を告げると踊りあがるような悦び。あのK・Mとは、やはりこのミュンツア。

「ああ、来てくださったですね。いろいろ、ご都合もあろうし、駈け違ったことと思ってい

と、やがてあの不思議な手紙を折竹に出したについての、極洋に横たわるといふ知られない国の話をしはじめた。

「折竹さん、あなたは五年ほどまえ北極探検用として、ウインターワツサー・フェアールツオイケ 潜水客船 というのを考案したミュンツァ博士をご存知ですか」

「知っています。じゃ、おなじミュンツァとなると、あなたは？」

「あの、アドルフ・ミュンツァは僕の父です」とクルトは感慨ぶかげに言うのだ。

「父は、ご存知のとおりアイスデツケの造船工学家でしたが、極地の大氷原を氷甲板として、そこに

新ドイツ領をつくろうという、夢想に燃えていたのです。新極北島——と、父は氷原上の都市をこう呼んでいましたよ。ところが、まもなく一隻を自費でつくりあげ、一九三三年には極洋へむかいました。僕は、体質上潜行に適しないので、捕鯨船の古物である一帆船パイクののつて『ネモ号』というその潜船につ蹤いていったのです。すると、運の悪いことには半月あまりの暴風雨。無電はこわれ散々な目に逢つたのち、『ネモ号』を見失つて漂流一月あまり。やつとグリーンランド東北岸の『Koldewey』《コールドウエー》の島フィヨルドの峽湾フィヨルドに流れついて、通りがかりの船を待っていました」

「その間、ネモ号は」と、ケプナラ君がロイド眼鏡をひからせる。

「なにしろ、無電が壊れているんで、サツパリ消息が分りません。すると、そこへ運よく一隻の捕鯨船が通りかかって、僕は無電の修理材料をもらいました。修理が成った、と、それから三日ばかり経った夜、偶然、ネモ号の通信をとらえたのです。ご想像ください。まるで、蒼白いランプのような真夜中の太陽のしたで父の通信と分ったときの、私の悦び。しかしでした」

「では、その通信にはなんとありましたね」

「奇怪なことです。僕は、父が気違いになったとしか思えなかつた。どうです、たとえば貴方がたがこういう無電をうけたとしたら……」と、クルトの目が、じつとすわって、当時の回想が胸迫つたような面持。それは、たぶんお読みになる皆さんもアツと言うだろうほどの、つぎの奇怪極まるものであつた。

——いま、われらは「冥路セル・ミク・シユアの国」に近し。ついにグリーンランド内地に新領土を発見す。

およそ、世に分らないということにも、これほどのものはあるまい。冒頭でもいったように国際法の規定では、沿岸を占めれば奥地も領土となる。いま、グリーンランドで新領土の余地などというものは、誰がみても皆目ないはずなのに……。では、そのミュンツァ

博士の通信は、戯れか狂気沙汰か

「僕は、その意味がいまだに分りません。もつと、上等な頭で考えたら分るのかもしれないが、僕にはどうも投げ出すより仕様がな。で、その無電はそれで切れました。あとは、待てど暮せど、なんの音沙汰もない。仕方なく、僕は父をあきらめて、その峡湾フィヨルドを出ていったのです」

「なるほど、お父さんのミュンツァ博士は、死を確認されている」

と、折竹が沈んだ顔をして、呟いた。

しかしその時、彼の胸をサツとかすめた一抹の疑問。ことによつたら、博士は「冥路セル・ミク・シユア

の「国」の不思議な手に、狂人となつていたのではないか。死体が、櫓を駆るように招かれてゆく途中、あの奇怪な無電をうったのではないか。しかし、その考えはその場かぎり消え、彼は、別のことを訊きだした。

「時に、クルト君は僕以外のものに、この話をしたことはないかね」

「あります、ただ一人だけです。それは、一昨年父をさがしに、グリーンランドへ行つたのです。その時、あの奇獣の鯨アー・ペラー狼をつかまえた。だが、その探検も結局空しくおわり、僕は全財産を摺り結核にまでなつて、とうとうこのイースト・サイドへ落ちこんだ。では、

なぜ本国へ行かぬかと仰おつしや言るのですね　それは、あのユダヤ人排斥でとんだ飛ばつちりをうけたからです。

当時、本国は鼎かなえの湧くような騒ぎ。密告が密告につきユダヤ人ならぬ僕までが、本国に帰れないことになりました。そうした、困窮のなかを父と面識のある、タマニー区検事長のロングウエル氏に救われました。僕が、こんな汚ないところでも死なないでいるのは、ロングウエルさんのお蔭といつても、いい。むろん、このことは一仍いちぶ始終話したのです」

そのロングウエル氏は、ニューヨーク暗黒街にとれば仇敵のような人物。清廉せいれん、誘惑をしりぞけ圧迫を物ともせず、ギヤング掃蕩そうとうのためには身命さえも賭そうという、次期州知事の候補者の一人だ。そうなると、ルチアノ一味とは反対の立場にある、ロングウエル氏が知るといふのではなんの意味もなさない。なぜ、ルチアノ一派がそれを知っているらしいのか、折竹がそのことを訊いた。

「クルト君、君はルチアノの連中と関りあつたことはないかね」

「ルチアノ」とクルトは驚いたような顔をして、

「僕が、なんで汚けがらわしいあの連中を、知るもんですか。驚いた。それは、どういう訳です
ね」

ルチアノと、知らない！　ますます、折竹は分らなくなっていくばかり。まったく、これはクルトが嘘を言っているか……、それとも、隠し事でもしてない以上、腑ふに落ちないことだ。と、彼はいきなり語気をつよめ、

「君はまだ、僕に隠していることがあるね。もし、金にしようというのなら、幾らでも出させるが……」

「えっ、何のこつてす」と、クルトはポカンとなる。

それに、嘘の分子が微塵もないということが、折竹にはハッキリと分るのだが……。しかしそれでは、ルチアノ一派がどうして知っているのか？　まず彼らの大好物である富源のようなものでもない限り、またそれを、あの一味が知る機会がないかぎり……と、なおも折竹は執拗に畳みかけてゆく。

「では君が、僕に未知の国の所在を、売ろうと言ったわけは？　あのお父さんの怪無電以外に、もつとこの問題を現実付けるものが、なけりやならんね」

「それは」とクルトがぐびつと唾をのむ。ついに、ここに最終のものが現われるか。「それは、あのアー・ペラー鯨狼アール・ペラーがどこにいたか。私が、あの奇獣をどこで捕まえたか」

「なに、鯨狼を捕獲した場所」

「そうです。父のあの無電を現実付けるものが、鯨狼の捕獲位置にあるのです。それが、北緯七十四度八分。西経……」

と、言いかけたとき、怖ろしいことが起った。とつぜん、窓硝子ガラスがパンと割れたと思うと、クルトの顛顛こめかみにポツリと紅いものが……。彼が、ポカンと馬鹿のように口を空けていたのも瞬時、たちまち、崩れるように床へ転げ落ちてしまったのだ。

ルチアノ一味の手が肝腎などころの瀬戸際で、クルトの口を塞いでしまったのである。西経……、ああそれが分れば。

「セル・ミク・シユア冥路の国」争奪

ルチアノの魔手——それはいわずと分ることである。まったく、訳も分らぬことばかりが引き継いでおこる事件のなかで、なにより骨子となるミュンツァ博士の怪無電が……やつと、ヴェールをと除ろうとすればもうこの始末。可哀想にと、折竹も暗然と死骸をみている。

ルチアノめ「セル・ミク・シユア冥路の国」になにを狙っている　何を何をと、ただ盲目さぐりの焦いら

だいたいその気持は、くそつ、ゴージャンノットの結び目に逢ったかと、折竹も嗟嘆さたんの声をあげるばかり。という、その錯綜の謎は並べてみてさえも、皆さん、頭が痛くなるではないか。

一、クルトの父ミュンツァ博士が、グリーンランドの内地に新ドイツ領を発見したという。しかしそれは、じつにどうにも考えられぬこと……、でまずまず「冥路の国」の魅魘みもうのため狂人になったとしか思えぬ。

二、ところがそれに、倅せがれのクルトは、鯨アー・ペラー狼の捕獲位置から、一脈の真実性があるという。まず、その地の緯度をいい次いで経度をいおうとしたとき、飛びきたった銃弾に斃たおされた。それは、疑う余地もないルチアノ一味の仕業。

三、では、ルチアノ一味はどこからその情報を手に入れたか。クルトは、清廉せいれん頑検事のロングウェル氏に話したのみと言うが、そのロングウェル氏はルチアノ一派の対敵——その辺の消息が、皆目分っていない。また、その地ヘルチアノ一味が食指を動かしているというについては、なにか驚くべき富源のようなものがなければならぬ。しかしもう、その事についても怪無電の真相も、すべてはクルトが墓場へ持って行ってしまっている。

と、踏み彷徨さまようような当て途もない気持のなかで、なんだか折竹は魔境の呼び声をうけ

てくる。謎を解く、それもクルトへの弔い合戦か。と、腰を抜かしたようなケプナラを促がしながら、やっと彼は死人のそばから腰をあげたのだ。

その数日後、彼はロングウエル氏に逢った。しかし、加害者の見当についても直接証拠のないかぎり、ここの、州刑法ではどうにもならない。ただ、クルトの死を無駄にさせたくない——この点では完全な一致をみたのだ。

ルチアノ一味を、向うにまわして「冥路セル・ミク・シユアの国」を踏破する。怪無電の謎を解き魔境征服という以外にも、不義の徒に対する烈々たる敵愾心てきがいしん。まず、彼らの策動を空に終らせることが、この際クルトへのなよりの手向けたむだろう。と、いよいよ「冥路の国」探検ということになった。

がその間、彼はおのぶサンの来訪を頻繁にうけていた。

「ちよいと、あたし……また来たわよ」といった具合で、まい日のようにやって来る。折竹も、三度に一度はうるさそうな顔をするが、こういう時も、

「お邪魔はしないわよ。あたしにかま関わらず、お仕事をやって」と言う。そして何時までも、折竹の向う側にかけていて、雑誌などを見ながらもちよいちよいと彼をみる、その目付きは唯事ただごとではない。折竹も、このごろでは慄ぞつとなっている。

また来たわよ、ご迷惑ねえ——と、言われるときのあの気持といたら、悪女、醜女しごめも典型的なおのぶサン。三十六貫の深情かと思うと、胃のなかのものがゲエツと出てくるような感じ。

それに、ここになお一層悪いことは、今度おのぶサンも探検隊について「冥路の国」へゆくということになっている。それは、アー・ペラー鯨狼の給仕者という役。ではなぜ、鯨狼が探検に必要なのだろう　というのは、棲息地の記憶だ。これは、あらゆる海獣を通じての顕著な習性で、どこで鯨狼が捕えられたかということ、観察しつつ知ろうというのだ。

してみると、おのぶサンとは当分離れられぬわけ。それを思うと、ゲンナリしてしまう。だが、折竹は神様ではない。もし神様ならばこう頻繁におのぶサンがくる理由わけを覚らなければならぬ。なにか、おのぶサンには惚れた腫れた以外に、折竹に言いたいことがあるらしい。で、これは、ニューヨークを去る出発の前夜のこと。

その晩、昨日は来ないからやって来るなど思っていると、案の定、扉を叩く音がする。彼は、それを聞くとぞくつとなつて来て、寝室に入りそつと息を凝らしていた。すると、「折竹さん、いないんですの」と声がする。帰るだろう、黙っていりや行ってしまいうだろう——と、思うがなかなか去る気配がない。そのうち、扉のしたからスウツと白いものが

……。封筒らしい。さては、奴め打ち開ける気持だな……と、思ったとき向うの気が変わったらしく、今度は、その封筒がスルスルつと引つ込められてゆく。

それに、折竹の全運命が掛つていようとは、神ならぬ身の知るよしもなかったのだ。

探検隊は、古くからある捕鯨港のサレムで勢揃いをし、五月十九日の朝乗船「デイスカヴァ」デイスカヴァ 発

見「号には、前ぜんしやう 櫓ぶる・ピーター 旗リがひるがえる。いよいよ、極北の神秘「冥路の国」へ。

ニュー・ファウンドランドを過ぎラブラドル沖にかかると、もう水の色もちがってくる。それまでの藍色がだんだんに褪あせ、一日増しに伸びてゆく昼の長さとは正反対に、温度はじりじりと下つてゆく。すると、グリーンランドの西海岸をみるデヴィス海峡にかつた時、「デイスカヴァ」アリ 見「号の全員がすくみ上るようなことが起つた。

水平線が、とつぜんムクムクと起伏をはじめたかと思うと、みるみる、無数の流水が

「発見」号をおそつてくる。船は、あちこちに転針してやっと遁のがれたが、じつに前門の虎去れば後門の狼のたとえか……極鯨吹きあげる潮柱のむこうに、ポツリと帆影のようなものを認めたのだ。まもなく、水夫長が案じ顔にやってきて、

「どうもね、あの横帆シッブ船にや見覚えがあるんですがね」

「とは、どういう事だね」

「あつしや、あれがルチアノ一味の『フラム号』じゃねえかと思ひます。全部、新品の帆なんてえ船は、たとねえんだから……」

そこで、補助機関が焚かれ、船脚が加わつた。全帆、はり裂けんばかりに帆桁ヤードを鳴らし、躍りあがる潮煙は迷濛な海霧ガスばかり。そうして、二、三海里近付いたとき双眼鏡をはずした水夫長が、

「やつぱり」と、言葉すくなに折竹をみる……その顔には言外の恐怖があつた。

まるで、送り狼のような「フラム号」の出現。それに、ルチアノやフロローが乗っているかどうかは知らないが……とにかく、この二探検船の前途になに事が起るといふことは、もうここで贅言ぜいげんを費やすまでもないだろう。

自然への反抗とともに、ルチアノ一派との闘い、氷原の道には、ますます難苦が想像されてくる。

そこからは、かつての北極踏破者ピアリーが名付けたという、中部浮氷群ミドル・アイスの広漠たる塊氷のなか。やがて、『Kangek』《カングック》、岬を過ぎ、『Upemavik』《ウペルナビック》
《島を右に見て、いよいよ拠点となるホルムス島付近の「悪魔の拇指」ディヴルス・サムという一峽湾

に上陸した。仮定「冥路セル・ミク・シユアの国」の位置はこの地点からみると、真東に二百五十マイルほどのあたりに当る。

この峡湾には、まるで人間への見せしめのような、破船が一つ横たわっている。ジョン・フランクリン卿の探検船「恐怖ザ・テラー」号の残骸が、朽ちくさった果ての肋骨のような姿をみせ、百年ばかりのあいだ海鳥の巣になっている。いずれは「冥路の国」を衝くものはこうなってしまうのだと、はや上陸早々魔境の威嚇に、一同は出会ったような気になった。まったく、そこはなんとという陰気なところか。

海霧ガスたちこ罩める、海面を飛びかよう海鷗シーガルやアビ鳥ルーシ。プランクトンの豊富な錫色の海をゆく、砕氷や氷山の涯しない行列。なんと、幽冥界の荒涼たるよ——とさげんだ、バイロンのあの言葉が思いだされてくる。しかしそこで、攻撃準備は着々と進められ、北部Ea「《エター》」地方のエスキモー人があつめられてきた。そうになると、問題なのはフラム号の行方。

「いるぞ。暫く見えないから断念あきらめたと思つたら、『フラム』号のやつ『ズエ』《クク》」
島にいやがる。どのみち、チャンバラが始まるなら、早いほうがいいな」

「フラム」号の、決着を見届けるため沿岸をさぐっていた一隊が、帰ってくればこんな話

だった。クク島とは、ここから約二十マイルばかりのところ。さだめし、向うも上陸隊が
 でて、この隊と競うだろう。風雲も死闘もそのうえの事と、いよいよ二十台の犬いぬぞりが氷
 原を走りはじめたのである。

アー・ペラー
 鯨 狼の檻、その餌となる氷漬の魚の箱。ダブダブ揺ぐようなおのぶサンの肥ひく軀も、
 今はエスキモーさながらに毛皮にくるまつている。

氷原と吹雪、氷河と峻しゅんけん嶮こうはんの登攀。奈翁のアルプス越えもかくやと思われるような、
 荷を吊りあげ、またおのぶサンを引きあげる一本ロープの曲芸。そのうち、落伍者が続出
 する有様。残ったのは、かなり名の知れた氷河研究者のザンベック、それに、ケプナラが
 気丈にも残っているが、もう、白人はこの二人だけにすぎない。しかも、寒気はますます
 厳しく、零下四十五度から六十度辺を上下している。

とこれは、七月末ごろのことだった。もう「悪魔の拇指デイヴルス・サム」から百マイルも来たと思っ
 たり、一隘路あいろのなかで大吹雪におそわれた。

天地晦冥となり、砂を吹きつけるよう。くるくる中天に舞う濃淡の波に、前方の連嶺が
 見え隠れしていたのも、暫し。やがて、一面が幕のようになり、咽喉のどの奥までじいんと知
 覚が失せてくる。みると、樞しゅう犬けんどもは悄しょうぜん然と身をすくめ、寒さに嗅覚がにぶったのか、

進もうとはしない。刃の風とまつ暗な雪のなかで、一同は立往生してしまった。

と、やがて霽はれ間が見えてきた。すると、ケプナラがあつと叫んで、白みかけてきた前方を指差するのである。

「アツ、なんだありや。ルチアノ一味の襲撃じゃないか」

みると、そこを横切つてゆく数台の櫓そりがみえる。来た、来た。乾魚や海象の肉をつめた箱を小楯に、一同は銃をかまえ円形をつくつたのである。と、どうした訳かそれを見た、おのぶサンがゲラゲラつと笑いだすのだ。

極光下の新日本

「冗談じゃない。ここで、この隊を殺やつちまったら元も子もないじゃないか。ねえ、『セ
ル・ミク・シユア
路の国』まで櫓跡に蹤ついていつて、そこでというなら話になるがね。だけど私や『フ
ラム』号の連中はすこしも恐かアないよ。恐いのは……」

と言いかけたが吹きつのる風のために、惜しいかな、続くものが聴えない。しかしこれは、あとで分つたことだが、蜃しんきろう気楼ろうだったのである。「冥路の国」へとゆく、一人のエ

スキモーの橇。それが、一つの山が数個の幻嶽をだすように、いくつもの幻景イマージュとなつて現われた。そういう、座興のあとで吹雪が霽れると、今までいた犬が一匹もみえない。「オヤ、どうした」と、思っているとき、彼処あちこち此処こちの雪のなかから黒い鼻先がひよくりひよくりと現われてくる。犬は、こういう酷寒の地では雪中にもぐつて、眠る——と、いうことが重大な使噓しそとなつた。その夜、これまで解けなかつた「冥路の国」の怪が、彼にやつと分つたような気がしたのだ。

「よくマア俺も、此処までやつてきたものだ」

と、折竹が感じ入つたように、呟くのも道理。

まず、無名の雪嶺を名づけた、P1峰を越えたのが始め、火箭ひやのように、細片の降りそぐ氷河口の危難。峰は三十六、七、氷河は無数。まつたく、この三月間の艱苦かんくは名状し難いものだった。しかし、ここで不思議に思われることは、この極地にいくるとおのぶサンの態度が、それまでのネチネチさを振り落してしまつたようなことだ。

「あの女は、寒気に充分な抵抗力がある。なにしろ、馴鹿となかいがいるあたりの北カナダへいつてさえ、肉襦袢タイツ姿で平気でいれる奴だ。しかし、どうも近ごろ様子が變つている」

さつきもおのぶサンは、なにやら意味ありげなことを呟いた。折竹には分らぬ異常なこ

とを知っているということは、その一事でも察せられなければならぬ。しかし瞬後には、彼はもうおのぶサンのことを考えていない。

「いずれ、フラム号の連中も俺を追ってくるだろう。橇犬の嗅覚は、磁石よりも鋭い。奴らは、前に往った犬の糞尿や凍傷の血の滴りを、なん月後でもちやんと嗅ぎ分けるから……」

しかし、この鉄の男は顔色も変えていない。微妙な、ほのめきを投げる深夜の太陽のしただ、とおい、雪崩なだれの音を聴きながら、じつと考えているのだ。周囲の、山巔さんてんも氷河もまったく死の世界。人を狂わせる極地特有の孤独のなかで、彼の頭はますます冴えるばかり。

「人間は……いや、あの人種は、ことによったら冬眠ができるのかも知れない。そのほかに『冥路セル・ミク・シユアの国』の謎を解く方法はないだろう。エスキモーが、『冥路の国』へ招かれるときは、こんな状態になる。脈が聴きとれず消えなんとし、体温は死温程度にさがってくる——それは、取りも直さず冬眠とおなじ状態だ。

ことによったら、異常な寒気に逢った場合、そうなるのではないか。そして、幻覚を見、遮二無二身をおこし、橇をかって氷の涯へと飛んでゆく。もちろん、そうした場合だから、

なんの苦痛も感じない。運よく氷罅クレヴァースにも落ちずに行き着けた奴らが、『冥路の国』の中で一部落を作っているのではないか。冬中、体中の脂肪に養われて、氷のしたで眠る。春になると醒めて、麝香マクス・オクゼン牛を狩る。——そういう、冬眠の生理がエスキモーにあるのではないか」

彼は、その考えにひじょうな自信をもっていた。小さな極光が、ぶよぶよごく真赤な虹をあらわし、その核心からでる金色の輻射線ふくしゃせんが、氷罅クレヴァースのうえをキラキラつと流れてゆく。翌朝も、隊はいつもながらのように、氷を踏み踏み黙々と発つていったのである。やがて、十日ばかり経つと連嶺が切れ、一行は盆地のような氷原のなかに出た。と、朝餌をやるうとして檻の戸をあけたおのぶサンの手をかい潜つて鯨狼アー・ペラーがとび出した。

「来てよ、鯨狼がとび出ちやつたよ」と、おのぶサンがあわててどなる間に、鱈ひれでヨチとつぜん、鯨狼が氷罅のなかに落ちたのだ。その縁にきて下をのぞき込んだとき、折竹の顔色がみるみる間に變つてゆく。

「オヤ、この氷罅クレヴァースのなかは、青い光じゃない。緑玉エメラルド・グリーン色をだすのは、海水シー・アイスじゃないか」

普通陸地の氷罅は、内部が美麗な青い光に染まっている。しかしここは、陸上にもかかわらず緑玉色の鮮光、それは、まず海水以外にはないことだ。で、試みに綱をさげると、その端がしっかりと湿ってくる。甜めると、それが海水の味。さすが折竹も、オロオロ声になつて、

「諸君、僕は鯨狼のために、大変な発見をした。ここは、グリーンランドを二つ三つに割っている、せまい海峡の一部なんだ。ミュンツァ博士が、なぜ新領土云々の通信をしたかということが、これでハッキリと分つた。

つまり、南部以下の沿岸をデンマークが占めた。だから、奥地も北部もデンマーク領になつている。しかし、いまここに現われた新瀬戸の発見で、ここから北が別の島であるのが分つた。ここは、隊長の僕の日本の領土になる。もし、本国政府が追認してくれれば、この極北の新島の先占宣言が成立する」

じつに、それは厳肅な瞬間だつた。それまで氷に覆われて現われなかつたこの瀬戸を、ついに見付けだした偉大な発見者、折竹。前ミュンツァ博士のような不備なものではなく、もし政府が躊躇せず立ちどころに追認すれば、グリーンランドの北部が赤い日本色で染められる。

まったく、その日一日は夢中裡の気持だった。こうなると、ただ気遣われるのがルチアノ一味の追跡。注意に、注意しながらその氷原を過ぎ、奥へ奥へと「冥路セル・ミク・シユアの国」に向ったのである。霧が濃く、峰も尾根も妙に歪んでみえる。と、その霽れ頃に見上げるばかりに高い、大きな氷河口のまえへ出た。氷の断涯が無数の滝を垂らし、屹然きつぜんとそびえている。すると、折竹が急に何を感じたのか、荷物のなかから微動計を取りだした。そしてその夕、おのぶサンにこう言いつけたのである。

「あの氷河は、じつを言う一つのものではない。猛烈な吹雪があつて積つたやつが、氷河のうえに固まって乗っているんだ。あいつが動きだすとアイス・フルツト氷海嘯ヒョウというのになる。危険だ。ケプナラ君に避難をいつてくれ給え」

と、その日の夜半ちかいころ。とつぜん、万雷の響を発し、地震かと思われる震動に、折竹がスリーピング・バッグ寝囊ニムからとび出した。出ると、じつに怖しいながら美しい火花に包まれた氷海嘯が、向うの谿たにへ落ちてゆく。よかつた、予知したことがなによりだつた。と、まづ一安心となつた。その翌朝のことだ。とつぜん一人のエスキモーの、喧けたたましい声で起きたのである。

「隊長、大変ですが、起きてくらつせえ。ザンベックさんはいねえし、ケプナラさんはオ

ツ死んで^ちいるだ」

驚いてゆくと、ケプナラは避難していない。やはり、以前の所に^{テント}天幕をはっていて、みるも哀れな死を遂げているのだ。氷海嘯の端に当たたらしく^{やすり}鑿で切ったように、左腕、左膝から下が無残にもなくなっている。折竹は、おのぶサンを呼んで、険しい目で見つめ、

「君は、昨日僕の命じたとおりに、言ったのだろうね。ケプナラ、ザンベック両君に避難しろって」

「ああ、あんなこと」と、おのぶサンはケロツとして、

「あたし、なんだか忘れてしまったらしいよ」

「馬鹿っ」と怒気心頭に発した折竹がごと一つ殴りつけ、

「なんのために……。君は、あの二人を殺してしまつたも、同じだ」

「殺していいでしょう。どうせ、殺さなければ今夜あたり、あんたが殺^やられるにきまつているから……。…」

「なに」

と、気を抜いたところへおのぶサンの手が伸びて、折竹の頸筋をつかみ、ぐいと吊しあげた。河馬女^{ファティマ}の大力には、彼も敵^{かな}わない。そのまま、片手にさげた彼をぐんぐん運んで

ゆき、クレヴァース氷罅のなかへぶらんと宙吊りにしたのだ。

「人が、せつかくお前さんを助けてやったのに、引つ叩くなんて……しばらく恐い思いをして、頭を冷ますがいい。お前さんは、ルチアノの『フラム』号をどう思っているね」

「オイ、上げろよ」折竹も悲鳴をあげはじめた。下をみれば、千仞せんじんの底から燃えあがる、青の光。

「じつを話すと、あのロングウエルとルチアノは同腹ぐもなんだよ。一体、アメリカというのがそんなところで、正邪も仇同志も一度実業ビジネスとなれば、それまでの行き掛りなんぞは、何でもなくなってしまうんだ。で、クルトがすべてをロングウエルに話したね。お前さんには言わなかったろうが、鯨アー・ペラー狼ペラーが捕われた位置を、ロングウエルは経度まで知っている。すると、海獣が遠い陸地のなかにいる。可怪おかしい。それに、ミュンツァ博士のあの無電があるだろう。ことによったら、海峡みたいなものがズウツと内地へ伸びているんじゃないか、——ロングウエルはこう考えたんだ。

しかし、こんな奥地へ行けるものといや、お前さんのほか誰があるだろう。こいつを一番利用してやって、事成ことじょうじゆ就じゆの暁やには殺やつてしまおう。というのが腹黒検事の考えさ。だから、じぶんを隠すためにルチアノを使って、すべてをギヤングの仕業らしく見せかけ

たわけだ。ケプナラも、頭巾をとりやロングウエルの腹心。へん、ご親友がお気の毒さまだったね」

「だが、どうして君は、それを知ったんだ」

「立ち聴きさ。あんたが、曲馬団サーカスにくるまえケプナラがやってきて、親方とひそひそ話をやっていた。うちの親方だって、猶太仲間だから」

「いったい、猶太人ジユウがどうしたというんだ」

「あの、ツイオン議定書とかにある、猶太建国ユダヤさ。こんな氷の島だから何にもなるまいけれど、とにかく、ながい懸案だった猶太国ができあがる。そのため書いたロングウエルの筋書に、うかうかお前さんが乗っちゃまったというわけさ。馬鹿、私がいなかったら、どうなったと思う。とうに、ニューヨークにいるうち打ち明けようと思ったけれど、私の言うことなんぞは信用しまいと思つたし……。第一、お前さんは私が嫌いだろう」

おのぶサンは、それだけしか言えなかつた。こみあげてくる恋情を、言い得ない悲しさを折竹も、感謝の気持溢れるようななかにも、氷海嘯のため、食糧の大部分をうしない、

「冥路セル・ミク・シユアの国」探検を断念せねばならぬ、切なさ。

ただ、米大州に現われたはじめての日本領を、政府が追認するのを切に祈りながら……。氷罅クレヴァスのなかでブランブランに揺

れていたのだ。

青空文庫情報

底本：「人外魔境」角川ホラー文庫、角川書店

1995（平成7）年1月10日初版発行

底本の親本：「人外魔境」角川文庫、角川書店

1978（昭和53）年6月10日発行

初出：「新青年」1940（昭和15）年6月号

※副題は底本では、「遊魂境《セル・ミク・シユア》」となっています。

※校正には「人外魔境」桃源社、1969（昭和44）年1月25日2刷、「新青年」復刻版 昭和15年（第21巻）」本の友社、2002（平成14）年8月10日復刻版第1刷を参照しました。

※地図画像は、初出誌と同じ桃源社版のものを用いました。地図右上の「探検家エリクゼン死去地」は、底本では、「探検家エリクゼン基地」になっています。

入力：藤真新一

校正：鈴木厚司

2003年2月10日作成

2014年7月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人外魔境 遊魂境

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 小栗虫太郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>